

### 国家、国土、土木

#### 中曽根康弘 元・内閣総理大臣「この人に聞く」(後編)

語り手：中曽根康弘氏

聞き手：藤井 聡

Fuji Saoshi

学会誌編集幹事長 東京工業大学大学院教授

土木の新しいかたちと政治——この不可分な両者の関係を大所高所から、中曽根康弘 元・内閣総理大臣に縦横に論じていただいた。本号巻頭「この人に聞く」の新春特別インタビューの後編を、以下に掲載する。

#### 近代日本とI-T時代

——政治全体を考えますと、その中心の一つに「軍事」もありますが、その一方に確かに「土木」があります。そうした点も踏まえつつ、現代の文脈の中で、土木というのは政治のなかでどのような位置を占めているのでしょうか。

**中曽根**——今までの政治家の努力によって、治山、治水、都市計画、交通などは一応整備されました。そういったものは大体、徳川時代に整備された。そしてその後、鉄道が入ったり、自動車が入ったり、電気がついたり、そういうかたちで近代化が行われました。

——そういう意味では、いまだ足りないところがあるかもしれないけど、これまでににおおよそ国土の骨格のほうはつくられてきたと。

**中曽根**——しかし、満州事変以降、政治的危機の戦争の時代には、土木事業は非常に閑却されて、財源の多くが軍事費のほうに転用された。それが戦後になって、自民党内閣を中心にして、それが戦後になって、自民党内閣を中心にして、すさんだ国土計画を推進していった。その一番の政治家は田中角榮でしょう。列島改造という思想です。

そして最近では都市計画とか、あるいは国土計画とか、そういう大きな計画は、新しいI-T時代、情報化時代に合うような方向への転換が行われつつある。まだまだはじめてですが、I-Tというものの活用によって、国土計画もかなり影響を受けてくるのではないですかね。特に交通体系への影響は大きいでしょう。

——八百万の神の御代からI-T時代まで、一気に話しいただいたところですが、土木という社会

の基盤と、その上で動く社会、経済、文化の動きと、この両者はお互いがお互いに影響を与えつつ少しずつ変化してきた、という歴史があったわけですね。

#### 国土と心の美しさ

——ここで少し論点を変えますと、これからの土木のなかで特に重視されてくるもの、と言えはなんでありましようか。

**中曽根**——土木のなかで、「美」というものは最近、非常に重要視されてきた。国立公園とか。独特の自然美を誇る施設。国土計画が前進してきていますね。

——そうしますと、たとえば、美しい田園風景ですとか、美しいまち並みですとか、そういう風景というのは、その土地の人たちの暮らしぶり、地域コミュニティのあり方の一つの「発露」であるとも言えるように思われますが、現代の日本の国土を顧みますと、美しくない国土、美しくない景観が、さまざまな場所に現れてきているのではないかと考えてなりません。とするなら、日本の美しい国土を守るためには、人間の暮らしぶりが、そして、日本人の気持ち美しくならないと、美しくならないのではないかとこのふうにも思えてくるところなのですが、そのあたりについてはいかがでしょう。

**中曽根**——それはそうでしょうね。人間の心が美しくなければ、美しい国土は生まれっこない。人間の心が美しいから、自然美とか、観光地と



そして、それを「守る」ために必要なのは、自然美や自然を大切にすること、そういう気持ちを養うことですね。子どもたちに対して。そしてそのためにも、子どもたちが自然を体験する、といったことが必要ですね。

### 国家像の下もとにある国土計画

—— 僭越ながら、先生の御著書を拝読させていただきますと、政治家に必要なのは国家像である、とお書きになっておられるのを拝見し、なるほどと感じ入っていたところでございます。ついては、そのなかで、国土のあり方も含めまして、日本のあるべき21世紀の「国家像」につきまして、お話を聞かせただけでないでしょうか。

**中曽根**—— 「国土計画」というのは、国家像、あるいは「国家計画」の下もとにある。すなわち、どういう美しい日本、国にしようかというところから、国土計画も生まれる。そして、その国土計画のさらに下の作業として、具体的な土木事業がある。そしてそのなかで重要なのが、山岳とか河川とか、海とか港湾とか、そういうような国土がもっている「個性」、それを大切に維持することです。

—— あるべき国土像というのは、たとえばアジアや、アメリカ、ロシアといったさまざまな国との対比のなかで考えられるのであって、そして、そのあるべき国家像の究極的なところに、「美しい国」という観念がある、ということでしょうか。

—— いうのが出てくる。芸術とか、美学とか、そういうことに対する国民的関心なり、教養の高さというものが、国土計画に非常に影響している。

よく地方の都市で、市町村長がある企画や計画を進めようという場合に、自然美を破壊する危険性が多少でもある場合には、住民投票で反対が行われるというのが各地でありますよ。それはいま言った、日本人全体に自然美を大切にしている心ができているかですね。市長や町長さんの人工的な細工に、反撃をする素朴さが日本人にはあります。

—— まだ日本人の心のなかにはそういう気持ちが残っている、と。

**中曽根**—— 非常に強いですよ。自然美を愛する心は、縄文以来、日本の歴史を流れてきているなか、培われたものだからです。そうした心、精神は、地方に行けば行くほど、根強くあります。東京とか大阪とか都会になると薄くなつてきます。

—— とすると、景観や国土の美しさの問題は、地方よりは都市部において表われてきているわけですね。

**中曽根**—— 都市部にある美は建築美、あるいは彫刻美にしかすぎません。要するに装飾的なものですよ。ところが、国土という概念はもっと素朴な自然的概念です。





**中曽根**——そうですね。たとえばアメリカやロシアに対する日本の個性を踏まえ、日本の自然的景観を活かしつつ日本の個性というものを形づくる、それが明治以来の日本の政治家たちの大きな仕事だったわけです。

——つい土木をやっておりますと、便利であることや早く着くこと、そして安全であること、といった(形而上と形而下で分けた場合の)形而下の効率、計算ばかりを考える性向がしてしまうところがあるように思われます。しかし、やはりそういうものは決して目的ではない、美しい国という「あるべき国家像」を実現する一つの「将棋の一手」のようなものにすぎない、ということ

ですね。

**中曽根**——それは当然ですね。

——当然……なるほど、それはぜひ、4万人の土木屋一人ひとりの胸に刻み付けたいお言葉です。

## 冬の次には春が来る

——さて、「美しい国」というキーワードでありますが、安倍前首相がおっしゃって、そして、美しい国という言葉の下で1年ほど議論してきたわけですが、現時点の新しい政局(福田政権)のなかでは、「美しい国」という言葉が使われなくなっています。しかし短期的にはそうであったとしても、政治の中心の一つには、美しい国とは何か、日本の個性とは何かということがあつて然るべきではないか、と思うのですが、そのあたりはいかがでしょう。

**中曽根**——安倍君の仕事は挫折したけど、「美しい国」ということを、総理大臣が言ったということは、残影として心に残ってくる。日本人の心の中に残影として、残ってくる。そして、美しい国にしなければならぬという気持ちはみんな持つていて、ある意味、その気持ちは呼び起こしたのです。

——そういう気持ちは、環境や国土が、きれいに美しくなっていくことにつながっていくわけですね。ところで、江戸時代後期にシーボルトが日本を訪れて、出島から江戸までの旅を許されたそうなのですが、その道すがら、会う人会う人がみんな幸せそうだった、と感じたそうです。ヨーロッパの

まちを歩くと、赤貧にあえぐ国民が至るところにいて、不幸そうにしている、しかし日本人は上から下まで全部幸せそうであった、なんと美しい国なのか、という記録を、シーボルトは残しています。この話を讀んだとき、なんとも言えず、心に残りました。今、そのシーボルトが日本を、たとえば長崎から東京まで歩いたとしたらどうお思いになる、と思われませんか。

**中曽根**——やはり同じように言うでしょうね。シーボルトが今生き返って歩いたら。外国と比べて、日本人の生き様生きさまが違う。それは徳川時代よりも、多少、喧騒けんそうになったり、看板が目についたり、いろいろなものはあるけれども、基本は崩れてないですよ。日本の住み方、生き様生きさま、基本は崩れていないですよ。

——大戦後いろいろと問題がもち上がり、今に至っては、親が子を殺す、子が親を殺すという事件が頻繁に起こるのを見ておりますと、悲嘆にくれるような気持ちにもなってしまうところもありますが、まだまだ大丈夫だと。

**中曽根**——歴史というものには、春夏秋冬ある。それで、非常に立派な時代もあれば、暗い時代もあります。しかし、それを通じて一貫している潜在力というか、内在しているエネルギーは変わりません。春夏秋冬が来るようなもの。冬の次には春が来ます。

——本日はお忙しいなか、長時間ありがとうございました。たくさんの素晴らしいお言葉、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。